【相対参照と絶対参照】

表計算には参照方法が「相対参照」と「絶対参照」の 2 種類存在します。

相対参照：自セル(数式が入力されているセル)を基点として対象セルがどの位置にあるか指定する。

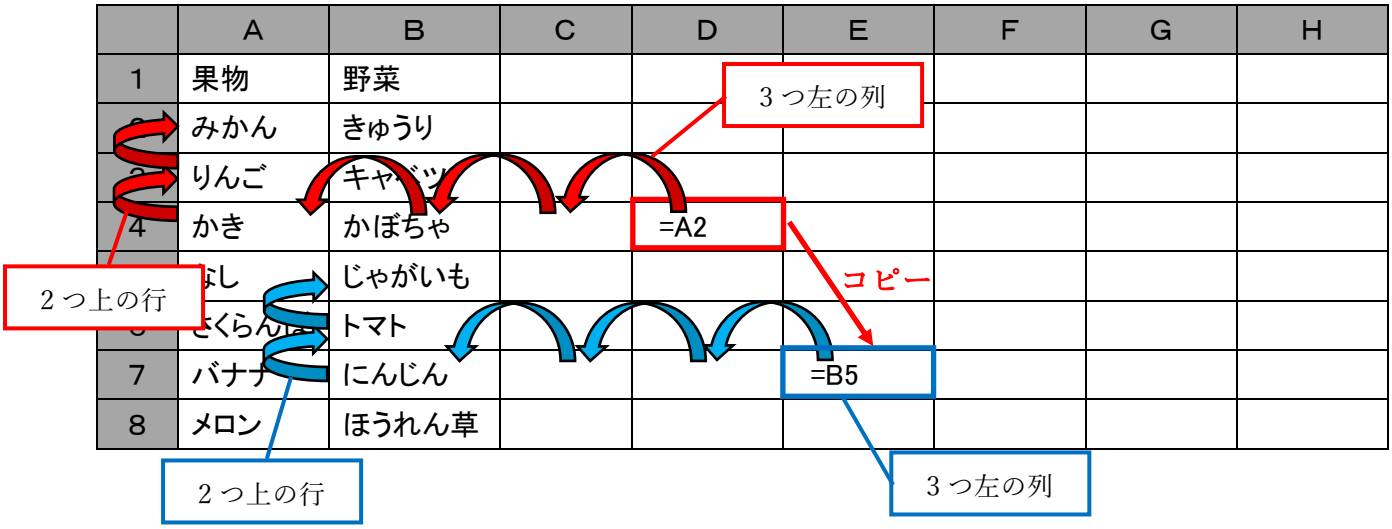
絶対参照：シートの左上(A1 セル)を基点として、対象セルが何列目何行目にあるか。

■相対参照

例えば、D4 セルに「=A2」と設定した場合、D4 セルには相対参照として「自セルから 3 つ左の列、2 つ上の行のセル」という情報が保持されます。

D4 セルを E7 セルにコピーすると、E7 セルにも「自セルから 3 つ左の列、2 つ上の行のセル」という情報がコピーされます。E7 セルの「3 つ左の列、2 つ上の行のセル」は B5 セルになるため、E7 セルには「=A2」ではなく「=B5」という数式が設定されます。

相対参照

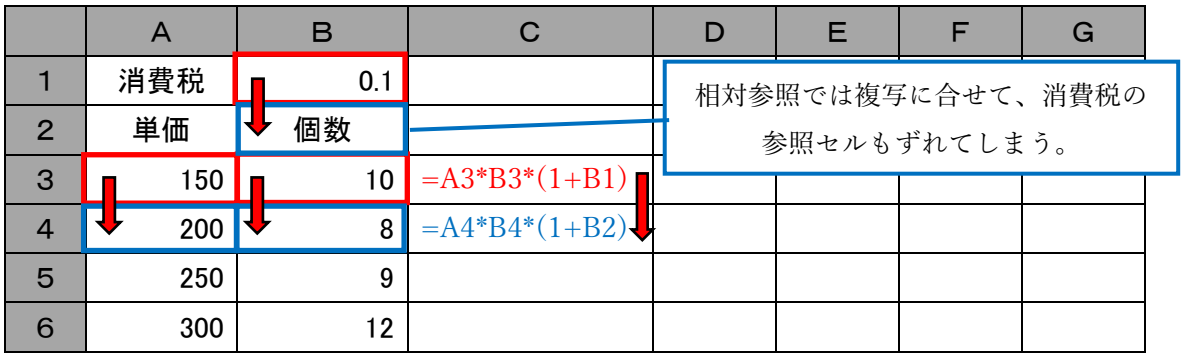


■絶対参照

絶対参照は数式が入力されているセルの位置に関係なく、シートの左上(A1 セル)を基点とした列番号、行番号で位置を指定します。

例えば、表 2 のセル C3 に消費税込みの金額を求める「=A3*B3*(1+B1)」という数式を設定した場合、セル C3 には「2 つ左の列のセル×1 つ左の列のセル×(1+1 つ左の列の 2 つ上の行のセル)」という情報が保持されます。

同様にセル C4 にも消費税込みの金額を求める数式を入力したいのですが、セル C3 をコピーした場合、セル C4 の「2 つ左の列のセル」はセル A4、「1 つ左の列のセル」はセル B4、「1 つ左の列の 2 つ上の行のセル」は B2 であるため、数式は「=A4*B4*(1+B2)」となり、セル B2 の”個数”という文字を数値に足すことはできないのでエラーが発生します。



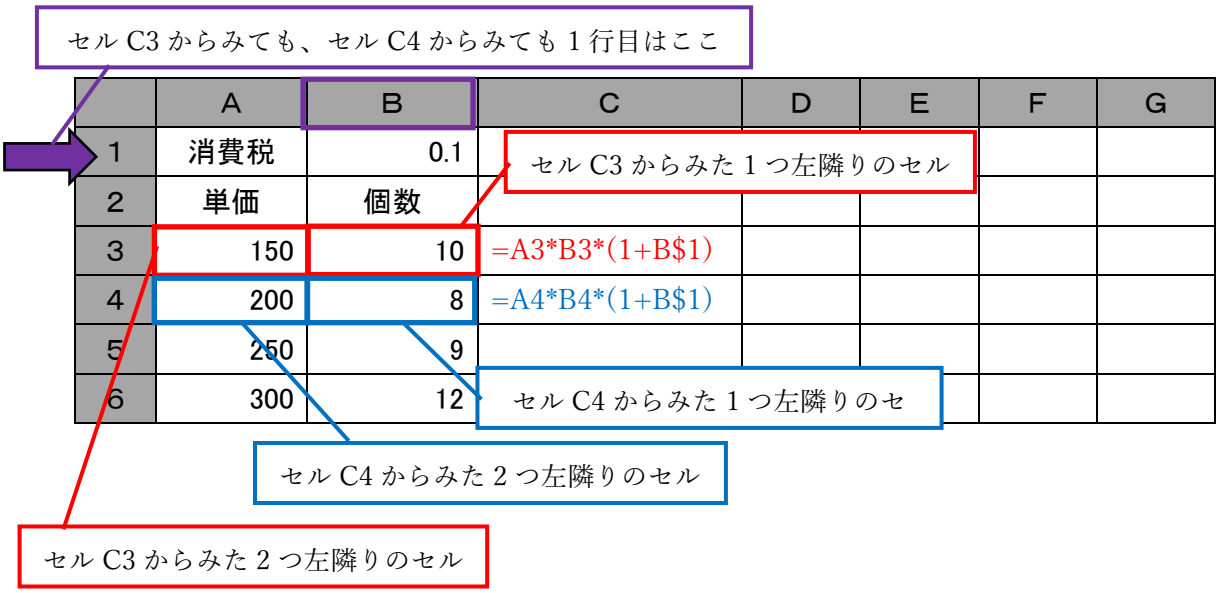
このため、セルの位置に関係なく特定のセルを参照するように絶対参照を使用します。

セル C3 に入力した数式「=A3*B3*(1+B1)」をセル C4 以降に複写する場合、複写は縦方向(行方向)に行われるため、セルが一つ下がる度に「A3」⇒「A4」⇒「A5」のように行番号(数値)が変わっていきます。

消費税が入力されたセル(B1)の行番号(数値)は変わっては困るため、この行番号(数値)の前に「$」を付けて絶対参照とします。

絶対参照の場合、基点は自セルではなくシートの左上(A1)となり、セルが保持する情報は以下のように変化します。

C3 セルに「=A3*B3*(1+B1)」と入力：「2 つ左の列のセル×1 つ左の列のセル×(1+1 つ左の列の 2 つ上の行のセル)」

C3 セルに「=A3*B3*(1+B$1)」と入力：「2 つ左の列のセル×1 つ左の列のセル×(1+1 つ左の列の 1 行目のセル)」

「2 つ上の行」はセルによって異なりますが、「1 行目」はどのセルからでも変わりません。このため、複写しても「B$1」の数値部分は変化しません。